



◇三鷹から見た池谷・関彗星（左）

11月1日4時45分、三鷹の東京天文台構内から撮影。キヤノン 50 mm, F2.8, トライ X, 20秒露出。香西洋樹氏撮影。

◇池谷氏が使用した反射鏡（下）



## コロナ・グラフで彗星を見る

平山 淳

小学校の頃、学校で遠足に行った作文を書かされると、「朝起きたらよいお天気でした。それから歯をみがいて、顔を洗って…」とやるとベルの鳴る頃になってもなかなか本番の遠足のところまでたどりつかないことを経験したことがおありかと思う。この彗星観測でもやはり朝起きたら良いお天気だったのであって、歯はみがかない人はいたかも知れないけれど、トランシーバーを観測所の中に3個備えたとか、魔法びんにお茶を用意したというようなことをいちいち書いていたらきりがないのは同じである。更にさかのぼって、この彗星が発見されてから突如として、彗星学者が東京天文台の中に輩出したことや、彗星がコロナの中に入ったら地球上で地震が起るかもしれないと言明した学者がいることなどはとても書いてはられない。

さて、1965年10月21日午前10時50分、乗鞍岳のコロナ・グラフのスリガラス上に尾をもった彗星が映ったときは、全く感激的であった。真黒い太陽へ向かって鯉のぼりのようにイケヤ・セキ彗星がうねりながら突進して行くように見えた。コロナ・グラフは色収差がひどいので、長短両波長をカットする緑色フィルターをかけて撮ったのが、表紙や写真ページにのっているものである。11時2分に撮ったものは露出時間が短いので、調子の悪いシャッターのむらが出てしまっているが、その後N・Dフィルターを更に入れて露出を落すようにした。原板はフジのパンクロ・プロセスで大名刺に2枚ずつとってある。太陽像の大きさは約15mm、コロナ・グラ

フの口径は10cmである。

さらに、私共はスペクトルを撮るべく、約150Å/mmのプリズム分光器をとりつけたが、これまた驚いたことに、頭部のものと思われるスペクトルは明らかに連続スペクトルが認められ、輝線は認められなかった。頭部のこの連続スペクトルはきわめて明かるかったが、尾のスペクトルは暗くてどのようなものであるか分らなかった。残念なことに、準備不足その他のことが重なって写真はとれなかった。その他に1回だけではあるが、コロナの偏光を測るKコロナ・メーターを用いて、彗星によるコロナの異常、彗星自身の偏光等を測定したが、現在のところは結果がでるかどうかわかっていない。また、彗星の頭が3つに分裂するということが目撃され、この一大スペクトルを一層面白いものにした。形の変化については表紙及びアルバムをご覧いただきたい。

ここで当日観測に当たった私共の仕事の分担を披瀝すると、宮沢・矢島・今井・平山の4名はコロナ・グラフのドームに立籠り、森下と小林はシーロスタットのある紅炎室に陣取り、守山と奥田は食堂にがんばって総指揮及び新聞記者等の撃退に当たり、代情は暗室にもぐって現像等を引受けるようにしたわけである。今回幸にして珍しい写真がとれたけれども、これは多くの人達のご助力に負うところが多く、なかんずく長沢教授のご配慮に深く感謝するものである。尾の形の変化その他に関してこれらの写真から得られることがいくつかあると思われるが、結果が出しだいまご報告したいと思っている。